

福島県現代俳句協会会報

第5号 2020年・冬

編集 福島県現代俳句協会会報編集部 春日 石疼
福島市八木田神明十三の八 090(6220) 4757

初めての県現俳吟行

安積開拓史を偲ぶ

台風14号が日本列島南岸をかすめて去った10月11日、県現俳協の初めての吟行句会が行われた。前日まで雨模様で天候が危ぶまれたが、当日は曇りで、集合場所の郡山市の開成山大神宮駐車場には、福島市、郡山市、須賀川市、白河市から参加予定の10名が参集した。

春日会長の挨拶と幹事の大河原真青さんの吟行の要領説明の後、さっそく全員で大神宮にお参りし、吟行の成功と各自、名句が生まれる事などを祈願した。つづいて徒歩で移動し訪ねたのは安積開拓のシンボルの開成館。ここは明治7年、区会所として建てられた擬洋風建造物で明治天皇の東北行幸の際は、行在所や昼食会場として使用された。現在は、安積開拓を中心とした資料が展示され、安積開拓官舎(旧立岩一郎邸)、安積開拓入植者住宅(旧小山家、旧坪内家)とともに、一般公開されている。館内には、開拓当時の歴史資料のほか、困難な開拓当時の暮らしが偲ばれる衣食住全般の展示がなされ、これらの展示の多くは句

材として俳人たちの詩心を揺さぶることとなった。吟行会一行は、この後開成山公園内の久米正夫(三汀)句碑や宮本百合子文学碑、開拓者の群像のモニュメントなどを見て句会場の大神宮参拝者休憩所に入り句会を行った。

互選による句会の結果は、永瀬十悟さんが高得点で上位3位までを独占、春日会長から会長賞を贈られ、予定より一時間余り早い午後3時前に終了した。

今回の吟行句会は、今年入会した筆者などを含め、初めて顔を合わせる会員もいた中、和気あいあいと楽しい催しとなった。次回は、浜通りや会津地方からの参加も期待したい。(高市宏・記)



〈主な当日の句は以下の通り〉

台風の後ざりがにを釣ることも 高市 宏
黄八丈広ごり豊の秋句ふ 唯木イツ子
密避けて記念写真や金木犀 宇川 啓子
群像の腕たくまし鱗雲 植木 國夫
雨上り巫女の踏むホコリタケ 大河原真青
豊の秋開拓団の祖を知らず 佐川 盟子
緋鳥鴨一羽が鳴けば次も鳴く 阿部多み子
桜紅葉開拓の槌聞いてをり 鈴木亜由美
開拓の人を想へば火恋し 永瀬 十悟
御祈祷をマスクして待つ七五三 春日 石疼

植木國夫さんが

福島県文学賞正賞受賞!

第七十三回福島県文学賞(福島県・福島民報社主催)俳句部門・正賞に県現俳会員の植木國夫さん(福島)の『鉄路つながら』が選ばれました。一貫して東日本大震災と原発事故後の生活や自然を詠み続け、今回の受賞も力のこもった五十句による受賞です。おめでとうございます!

○鉄路つながら 麦秋の標葉郷

○瓦礫にも歳月のあり芥子の花

会員作品7句

敗戦日

県会員作品一句鑑賞

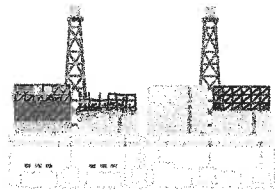
津波の碑

鈴木 正治(福島「暖響」「鈴の会」)

群盗のごと被災地を猪ら駆く
三・一一数多夭死の声こだま
津波の碑真つ白き鳥ばかり舞い
広島忌白昼へ空剥けてゆく
コロナ禍や赤一色の世界地図
部分日食兜太の狼吠えつづく
あやめ草芭蕉の道を坊主持ち

大河原真青(郡山「桔槔」「小熊座」)

オオカミの睦言密か冬の月
避難民の一化身なり氷瀑は
カノプスの壺らしきもの檻樓市に
はんざきの一日いたはる星の数
海霧抜ける幼霊の歌父の歌
風涼し海には芥宇宙に塵
帯電の象の歩める敗戦日



草魂

柴田 郁子(いわき「岳」「晨」)

万感の思ひ原爆忌の朝
蓮見舟弥陀の世界に入ること
サングラスかけてすこし強くなる
彼是のしげりは全てズリ山と
よく見ればあれは正しく穴感い
秋光や遍く生きるものたちへ
草魂を静かに思ふ秋の夕

故郷喪失

浅田 正文(金沢市「秋」)

人智超ゆ 原発事故や 九度の冬
福島へ 左義長の空 続きおり
原発忌 祈りのカフェを 雨が抱く
逃げ水や 故郷遠くまた遠く
林道の 山百合香る 頃です
振じ花や 決められぬまま 九年逝く
蝸よ 福島ことばで 鳴いてますか

向日葵の百の直列おそろしき 丹治キミ

東日本大震災の後、福島県の各地でヒマワリが植えられた。当初は、原発事故で汚染された土を浄化しようという取り組みであったが、除染効果は極めて限定的と報道されると、荒地を美しい風景として残すためのヒマワリ畑となっていた。

作者は、見事に咲いたヒマワリの夥しい連なりに感動すると同時に違和感を覚え、放射能をも意識したのであろう。人間の為すことの「おそろしき」。

『現代俳句』列島春秋(令和元年六月号)より。

(佐川盟子)

豆撒く声世に不器用な男ゐて 柝窪 浩

私の手元にガムテープで束ねた全篇コピーの句集がある。曠野句集叢書・柝窪浩句集『千語万語』(昭和四五年刊)である。柝窪先生のあの炬燵ひとつと言つてよい部屋で、訪ねると炬燵からモンモン体を起こした先生からいただいたものだ。闘病生活の長かった先生は、決して恵まれた生涯を送られたわけではなかったろうが、素晴らしい境涯句・叙情句をたくさん遺した。掲句はそんな先生の恥ずかしそうな笑顔を思い出させる。先生お手製のこの冊子を眺めるたび目頭が熱くなる。

(春日石彦)

佐藤弘子・第一句集『磁場』

玉句集『磁場』のご上梓、誠におめでとうございます。京都の青磁社からの出版で、弘子さんを想わせる美しい装丁の弘子さんの集大成がここに上木された。

はなびらの押し合ふ音の中にをり

白梅のたうとう空へ滲み出す

幣（みてぐら）にされてしまった風の蝶

掲句は、福島県文学賞の俳句部門で最高峰の正賞の榮譽を受賞されたときの句である。選考委員の金子兜太氏がこれらの作品へ「確実なる手法、韻律の硬質なひびき、措辞の確かさ、心象といえる映像化の確立に孤心深し」と評された。

会話とてなし母の日の母に添ひ

たびら雪父の背中を流ししこと

嫁がせてより冬帽を離さざる

こうしたご両親ご家族への慈愛に満ちた作品は、初期から近作まで通して詠まれている。

余震なほ原子炉四基冴え返る

黙りこくるな青柿も福島も

地震津波・原発による核災害を経験した者にしか解らない信条の吐露に共鳴共感しかり。

君はもう素粒子粉雪また粉雪

みんな死ぬ林檎綿虫が来てゐる

生老病死の哲学も念頭に、俳句の力「磁場」をもつてして佐藤弘子さんの独自の美意識に基づく詩的作品群が展開されている。（国分 衣麻）

前号会報より

この句がよかった！

永瀬十悟

水受けるかたちに開く紫木蓮 高市 宏

家に紫木蓮があるが全くこの通りの花である。しかしこの句に会うまでその発想はなかった。この美しい把握はどこから来るのか。写生の醍醐味である。

樹の灰の樹のおもかげを蛇滑る 斎藤 秀雄

灰がおもかげとは深く沁みる。人も火葬により灰となるが、それもおもかげなのだろう。脱皮を繰り返す蛇は死と再生の象徴か。妖しい心象風景である。

ふうせんを持たされてゐる不安かな 平子 玲子

子どもから紐を預けられたが、手から離れないか、割れないかと心配する。自分のものなら浮かべて楽しめるのに、もしものときの子の反応が不安なのだ。

ウイルス蔓延赤べこは首振つてをり 池田 義弘

赤べこの黒い斑点は疫病の跡で、近くに置くと流行り病に感染しない伝説があるらしい。ゆっくり動く首は「あやまつつまつたない」と言っているのか。

追伸に本音を少し実南天 服部きみ子

追伸は手紙の書き直しの手間を避けるためだが、本文とは別に気持ち伝えたいときにも有効。南天は「難を転ずる」。きつと相手に通じるでしょう。

手拭いの折り目眩しき早苗月 鈴木亜由美

私の生家は染物屋で、子供の頃に熨斗袋に手拭いを畳んで入れるのを手伝った。陽光溢れる田植の季節に出番は多い。「折り目」を詠んで戴きうれしい。

全国大会・秀逸賞

平子玲子さん（いわき）

東北大会・佳作賞

鈴木正治さん 清水茉紀さん（福島）

おめでとうございます！

今年にはコロナ禍で多くの俳句大会の開催は中止になりましたが、福島県からも多数の応募があり、その中で表記の方々を受賞されました。

名古屋で開催予定だった全国大会では、平子玲子さんの「嘘泣きのゐるかもしれぬ涅槃絵図」が秀逸賞に併せて伊藤政美さんの特別選者特選句に選ばれました。また青森で開催予定だった東北大会では、鈴木正治前会長の「春を病み甕瓶も季語として磨く」と清水茉紀さんの「戦時下を巻紙みたいに話す祖父」が佳作賞に輝きました。おめでとうございます。

編集後記

初めての吟行句会を楽しく終えることが出来ました。新型コロナウイルスが収束し、来年は皆さんと総会・講演会・吟行などでお会いできることを願っています。時節柄、ご自愛くださいませ。（K・S）

死にたれば人来て大根煮きはじむ

下村 槐多

海野良夫(湯川)

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

野村登四郎

阿部るみ子(福島)

喪の家の、一つ屋根の下の静と動、さらには聖と俗の対比と言おうか。死の厳肅さに打たれ、悲しみを抱いて死者の傍らに座す一群と、それら家族や親族のための賄に立ち働く一団。一方には沈黙あるのみ。他方には煮炊きの品の数、分量や手順等についてのやり取り。加えて故人の思い出話、噂話。時には猥雑な笑い声も起こる。死と生の現世での対比と並存の図を、揚句はまざまざと浮かび上がらせる。

止せよ、と当の私が言った。これは俳句とは呼べないよ。「くすればくする」という因果律に凭れた単なる報告だ。やたら動詞を並べるへまをやつて、切れも無い。大根は季語だが、季語特有の働きをしていない。第一「死にたれば」なんて強引で俗な措辞を俳句へ持ち込むのは邪道だ！しかしこの句のインパクトは、私には到底否定出来なかった。揚句との遭遇、いや衝突事故以来、切れや季語を大事にした上品な詠みぶりの句をくそれが愚作を遙かに超える作と知つてもく「イカニモ句」と称して遠ざける偏狭な心性が我が身に根付いてしまった。おい、この後遺症をどうしてくれるんだ、とすごんでみても、相手はにべも無く、知らんぷりだ。

私を変えた一句

能村登四郎のあまりにも有名な句です。槍を投げたあとの、なんでもない動作を詠んだ句ですが、「春ひとり」で句全体のムードを決定しています。句の場面がはつきりと目に浮かんできます。若さの持つ孤独、憂い、切なさを感じます。一語も動かない句で、すごいなあと思います。た。

俳句をかじって数年たったころ、この句に出会いました。以来、俳句のシンブルにして、だからこそ重層的に表現が可能な十七文字の世界に魅了されています。しかし、俳句を鑑賞する楽しみと、俳句をつくるのは、まったく別。私の場合、人の俳句を読む楽しみのために、句会に参加しているようなもので、「私を変えた一句」とは、残念ながら言えません。

ただ、何かの折に、句のイメージがひらめいたら、それに気づけるようでありたい。そして、根気よくピタツとくる言葉をさがし、まさかの会心の一句ができたら、その時は、「ユーレカ！」いや、「春ひとり！」と叫びたいと思っています。いつになることやら。

私の好きな季語

「矢羽すすき」 鈴木満喜子

ご近所の句友でもある奥様が亡くなられた。挨拶に行つた折門を入ると一ト叢の矢羽芒がさやさやと迎えてくれていた。私も枕花に添えてもらいたく庭の吾亦紅と矢羽芒を持参していた。羽根の模様から鷹の羽芒とも言うらしい。茶道も嗜む人なので、きつと喜んでくれたかなと勝手に思っている。

すすきかな」を思い浮かべる。ひらがなで生かされた句であり、「はらりとおもき」によって生命体となつて生きている。

芒の一生は人間の一生に似ていると思う。青芒から始まり、尾花となり、そして枯尽くす。

枯れも捨てがたい風情のある人生のドラマである。私が傾倒してやまない齋藤慎爾の句を揚げた。蛇笏とは対極にあり、蛇笏の実と慎爾の虚である。三十年前から私の机上にゆるぎないバイブルとして存在している。

- 一人より二人は淡し白芒
- 少年は少女の瑕瑾青芒
- 青芒一痕として生れしか

